

新型コロナウイルス感染症が 変えた大学の日常

北海道大学医師会
北海道大学大学院医学研究院公衆衛生学

たまこし あきこ
玉腰 暁子

2019年12月に中国で患者が報告されて以降、新型コロナウイルス感染症はあっという間に世界中に広がった。2020年度当初はまだ感染の特徴も十分につかめておらず、人と人との接触を減らすために、入学式は中止、準備もできないままに授業はオンラインに移行した。学生、特に札幌で独り暮らしを開始したばかりの新入生は本当に心細かったことと思う。家族・友人から離れ、周囲の様子もわからない中、朝から夕方までPCに向かい合う日々は、身体的にも精神的にも辛かったに違いない。とはいえ、年度の途中から少しずつ制限が緩和され、後期からはキャンパスに活気も戻ってきた。さまざまな制限付きではあるものの、対面講義や実習、課外活動も再開された。

教員の生活も変化した。一方的な講義より反転授業が望ましい、など言われてはいたが、外圧がなければなかなか講義方法、内容の見直しは進まない。それがこのコロナで一転。オンラインあるいはオンデマンド対応を余儀なくされた。受講生が10名程度の大学院向け講義は、オンラインであっても、学生にもカメラをオンにしてもらい、顔を見ながら、時には冗談も言いながら、が通用する。グループディスカッションを行う機能もあるので、慣れないながらも対面講義と大きくは変わらず実施できた（と思いたい）。グループ間の討議状況を確認できるようにと導入したGoogle documentなども少しずつ使えるようになったのは収穫である。しかし、医学部の100名以上を対象とする講義では、対面のように「間」を利用することが難しい。同じように話しているつもりでも、受け手の表情なしに話すのでは、勝手が違う。何しろ画面の向こうに本当にいるのかどうか分からない。もちろん、どんな学生が受講しているのかも分からない。人は人に反応しながら話をする、という当たり前のことに気づかされた1年だった。

年度が替わり、新1年生だけでなく2年生にも（昨年度できなかった）入学式を、などと悠長なことができていたのも束の間。変異株の影響か、GWの出入の加減か、再び新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっている。このような状況下、第一線で頑張ってくださっている保健所・医療機関の方々には心よりお礼を申し上げたい。大学では、緊急事態宣言を受け、講義も再びオンラインが原則となった。これが今後はデフォルトになるかもしれない。昨今のツールを少しでも使いこなしていければと願っている。

パンデミックと大学の対応

北海道大学医師会
中央大学保健センター

さ た ふみひろ
佐田 文宏

昨年3月、WHOによって新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がパンデミックとの認識が示されて以来、わが国においても感染拡大・縮小を繰り返してきました。大学においても、未知のウイルスへの感染症対策として、これまでさまざまな対策が講じられてきました。まず取られた対策は、学生には原則として大学構内に入構させない措置でした。多くの大学でオンライン授業になり、卒業式や入学式も中止となりました。

学生の日々の健康状態を把握するため、検温とともに健康観察記録を付けることが奨励されました。文部科学省から、「大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドライン」という学内における感染リスクを可能な限り低減したうえで、持続的に教育研究活動に取り組む方針が示されました。特に、「3密」（換気の悪い密閉空間、多数が集まる密集場所、近距離での会話や発話が生じる密接場面）が重なることを徹底的に回避する対策が有効とされました。

最初の緊急事態宣言が解除された頃には、大学への入構制限解除に向けて、各大学で具体的な方法の検討が行われました。ちょうどその頃、全国の大学の保健管理担当者にアンケートをする機会を得ました。対面授業再開のために学生を入構させる際の対応として、サーモグラフィーの設置と健康観察記録の義務化を行った大学が各々約4割、チェックリストによる感染防止対策の点検が約3割でした。その後、感染の拡大・縮小が繰り返されてきましたが、このような感染防止対策の徹底で、学内の授業中の感染はほとんどみられませんでした。

現在、全国的に第4波といわれる感染の急拡大がみられ、感染力の強い英国型などの変異株への置き換えを特徴としています。重症者の急増のため、病床の逼迫などこれまでにみられない様相を呈しています。このような状況下で、全国の大学の保健管理担当者と連携し、入試における感染症対策、医療従事者や医療系の学生へのワクチン接種、職域接種などの情報交換を行い、情報の共有化を図っています。また、保健管理担当者が相談しやすい環境の整備、情報共有の場の設定、指針の策定などを立ち上げたワーキンググループで取り組んでいきたいと考えています。このようなことを積み重ねることによって、キャンパスに安全・安心とともに学生の笑い声が響く日を取り戻すことができると願っています。